

プロティノスにおける「個別性」の成立

— 魂のプロアイレシス（固有の向き）に注目して —

渡 辺 華 月

序

新プラトン主義の創始者と言われるプロティノス（205-270）は、プラトンが説く魂の不死説すなわち魂が身体から離れても存続する永遠なるものであるとする発想に立脚し、個々の魂が、特定の「この」個別者としてあることの理由づけについてさらに踏み込んだ考察を展開している。「私」のこの魂が他の誰でもなく「私」の魂であることが、魂の個別性であり、同一性であるが、個別者が相互に異なることについては、一般に、身体が異なることに関連づけて考えられるのではないだろうか。「私」と他の誰かが異なっていることは、一面には、異なる身体を有する者同士であることのうちに現れている。だが、魂が身体を離れても存続し、かといって個別性が取り払われて単一の魂の内に溶解するわけでもなく、なお個別的魂として、輪廻のうちにあって次の転生の機会を窺っているとするプラトンの前提に立つなら、身体を得てはじめて個別性が成立するわけではなく、魂の個別性は身体的区別に先だっており、むしろ個別的魂が転生のたびごとに身体を選んでい、と言うべきではないだろうか。プラトンにあっては『国家』617d-620eの「エルの神話」のなかで、魂のそれぞれが何に生まれ変わるかを選ぶ「生の選び」により、輪廻転生はなされると説明されている。そこで言われている「選び（ハイレシス）」をプロティノスは、それぞれの魂に固有の——「選び」「意志」「目的」等と訳される——プロアイレシスという、魂の本性に密着したあり方としてとらえなおす。

今、ここにこの身体を有する「私」が個別者としてあること、つまり私の

個別性は、身体を得てはじめて成り立っていることではなく、あくまで魂がどこに中心を向けているかという、プロアイレシスすなわち各々の魂の「固有の向き」に即して成立するのである。（以下、当稿ではプロティノスがいうところのプロアイレシスを「固有の向き」ないし「固有の意志」と表わすものとする⁽¹⁾。）

『エネアデス』第27論攷（IV3）「魂の諸問題について・第一篇」の13章では、魂が自らに固有の向きによって、自らの本性に応じた特定の身体に降下すると述べられている。また、続く論攷である第28論攷（IV4）「魂の諸問題について・第二篇」の特に31章以降では、宇宙論の文脈で、宇宙を全体として管理統括する宇宙全体の魂が知性界に向き合う固有の向きないし固有の意志が語られている。

プロティノスにあっては個別性についての考察が、しばしば宇宙論に結びつけられる形で展開する。それは彼が個別者を、大宇宙を反映した小宇宙として、また宇宙全体の連関の一端を担う部分者としても見ていることに基づく。当稿で扱う一連の論攷では、個別性の問題、宇宙論の双方で固有の向きが語られている。当稿では魂の様々な次元で語られる固有の向きに焦点を当てて、プロティノスが個別性の成立を宇宙論的な視点を含めどのように考えているかを明らかにしたい。

第1章 「固有の向き」に基づく魂の身体への降下

プロティノスは第15論攷（III4）「われわれを割り当てられた守護霊について」で、プラトンが「エルの神話」で言うところの「あの世界での魂の選択」を、個別的魂のもつ本性を示唆するものとしてとらえなおす。つまり「その魂の普遍的、永久的な固有の向きと有り方」（III4[15]. 5. 2-4）こそプラトンが示そうとしたものだと言うのである。

（引用文1）「だが、もし魂の固有の向きが決定されていて、その魂に

前世の生活の結果としてすでにそなわっている部分が支配的になるならば、もはや身体は、その人にとってはいかなる悪の原因でもないことになるであろう。」(III4[15]. 5. 46)

プラトンが「あの世界での魂の選択」の眼目としているのは、結局はいかに個々の魂がアイデアの世界、知性界に目を向けて生きてきたかである、とプロティノスは考える。この「私」が誰として生まれ、どのような品格の守護霊に見守られるかは、「私」自身が一単に自らの身体の世話に拘泥するだけでなくいかに自身の内なる純粹無雑な知性に自らの魂を向けてきたか、魂自身の固有の向きの有り方にかかっているのである。

「私」がいつでも、誰として生まれるか、一般に「偶然」や「運命」として片付けられてしまうようなことまでが、自分自身の知性に向き合う姿勢により、自分次第で決まってくることであるとするならば、そこには自らの有りようを運命や環境のせいにするような責任逃れや言い訳を許さない厳しい人間観があると言える。一方でそれは偶然や運命に振り回されることのない自由、自律を人間に認めることでもある。運命が「私」を規定するのではなく、「私」が運命を選んでいるのである。ただし運命そのものを決定づけるほどの魂の固有の向きが、身体降下に先だって選ばれていて、身体降下後も生の方向を定めていくものであるとするなら、それぞれの魂に固有の向きは「今日から気持ちを入れ替えてがんばります」等という軽い決意で変更できるようなものではなく、言うなれば身体的欲求に引きずられた人間はずっと欲求に引きずられたまま生を終え、次の転生後も同種の生を繰り返すことになりはしまいか。劣悪な者が知性界に目を向ける転換点が果たしてありうるか、これはプロティノス哲学を評価するうえで一つの問題ではある。プロティノスの眼目は人間の個別的な生を運命の支配で決定論的にとらえるのではなく、自分が誰として生まれるかということをも含めて、個別性の成立を魂の本性および固有の向きに結びつけることであり、その意味で魂の自主性を重視しているのである。

魂の身体への降下にあたって、固有の向きが決定的な役割を担っていることは、当稿「序」で触れた第27論攷（IV3）「魂の諸問題について・第一篇」の13章で詳しく述べられている。

（引用文2）「したがって、逃れることのできない法と裁きが、それぞれの魂を一定の秩序のもとに個々の身体に向かわせる或る本性の内にあり、その本性が向かわせる個々の身体とは、それぞれの魂の固有の向きとあり方にふさわしいものを原型とする模倣である。」（IV3[27]. 13. 1-3）

魂の降下のタイミングは天の回転運動に協和していて（IV3[27]. 12. 21-22）、「しかるべき時がくれば、あたかも自分の意志によるようにして自分の向かうべきところへと降りて行き、そのなかにはいつていくのである」（IV3[27]. 13. 7-8）とされる。「向かうべきところ」として、魂自身の固有の向きとあり方にふさわしき身体が割り当てられるのであり、その意味では魂がいかなる身体に降下するかは、魂自身が選び取っていくものである。身体への降下は魂の自主性や自発性が否定されることでは決してないのである。

第2章 宇宙全体の魂の「固有の向き」

この世で個別身体に関わりをもつのは個別的魂であるが、可視的なこの宇宙を全体として管理統括する魂として「宇宙全体の魂」⁽²⁾ というものをプロティノスは考える。個別者は宇宙全体に対しては、身体的にはまちががなく宇宙の一部である。ただし、魂については、個別的魂を宇宙全体の魂の部分であるとはプロティノスは考えない。個別的魂は、個別身体に関わりをもつが、完全に身体に沈潜しきったわけではなく、つねに知性界にとどまる部分、つまり魂の上位部分としての知性的部分を有している⁽³⁾。その限りにおいては、個別者の魂は宇宙全体の魂には従属しない独立存在であり、宇宙

全体の魂とは「姉妹魂」の関係⁽⁴⁾にあるのである。では「姉」である宇宙全体の魂については、固有の向きはどのように語られているのであろうか。当稿「序」で触れた第28論攷（IV4）「魂の諸問題について・第二篇」の31章以降は、しばしば宇宙全体の魂に関して固有の向きあるいは固有の意志が語られる。だが、固有の向きが語られる狙いは、個別的魂についてと宇宙全体の魂についてとは、ある意味で逆方向を向いている。固有の向きを個別的魂に帰することは、劣悪な振舞いの責任を個別者自身に負わせる狙いで語られることが多いが、宇宙全体の魂については、宇宙内の諸部分に生じる劣悪さや不和に対して免責する意味合いで、つまりそうした劣悪さや不和が宇宙全体の魂の「固有の意志に基づくものではない」と語られることが多いのである。

宇宙全体は同じ一つの魂つまり宇宙全体の魂がすみずみまでいきわたった「一つの生きもの」であり（IV4[28]. 32. 4-7）、その活動はロゴス⁽⁵⁾にしたがってなされる（IV4[28]. 33. 1-2）。宇宙全体のロゴスにしたがった活動は、不滅の物体の領域である天体や星々⁽⁶⁾においては、規則正しい動として現われる。さらに天体や星々の活動に影響される仕方、地上界の出来事が生起するのである。

地上界の出来事までを含みこむ宇宙全体の活動は、全体としては、「あたかも諸部分が多彩な舞踏の動きのもとに一つの舞踏劇を演じるとき」（IV4[28]. 33. 6-7）であるとされる。宇宙全体の動を舞踏に喩えつつ、プロティノスは宇宙全体の魂の固有の意志について言及する。

（引用文3）「しかし、舞踏家の身体の部分部分までが、それぞれの舞姿で同じ形状を保つのはどうしても不可能なことであって、彼の身体は舞踏の型にしたがって曲げられ、彼の肢体の一部はぴんと張られるけれども、他の一部は弛められ、ある部分は激しく痛々しく舞うが、ある部分は舞姿の変化によって安らぎを得る。そして踊り手の固有の意志は他に向けられていても、彼の肢体は舞踏にそって動かされ、舞

踏に奉仕し、その舞踏全体の完成を助けるのである。」(IV4[28]. 33. 12-19)

舞踏家は舞踏に際して、固有の意志を身体の特定の部分の動きに向けているわけではなく、劇としての一まとまりをなしている舞踏全体にこそ向けているのである。(1) 舞踏家の固有の意志は、宇宙全体の魂の固有の向きを喻えたものである。宇宙全体の魂の固有の向きは、宇宙身体の諸部分個々の動きや状態に向けられているのではなく、可視的な宇宙の秩序の源泉である知性界のアイデアに向けられている。つまり一まとまりの舞踏全体は知性界にあって一体になって存在しているアイデアの喩えである。(2) 宇宙全体の魂は、知性界のアイデアを仰ぎ見て、そこから流れ出るロゴスを宇宙身体に受け渡している。ロゴスにしたがって、天体や星々の規則正しい運行がなされるが、そうした天体や星々の運行が舞踏において形を与えられる肢体全体に喩えられていることが示唆される (IV4[28]. 35. 21)。(3) 舞踏における身体の諸部分は、他の部分と協同することで全体の舞踏の完成に寄与してはいても、個々それぞれだけで肢体全体の形を表現することはできない。このことは、地上界の諸事物を喩えたものとして理解することができる。

地上界を含めて宇宙全体のあり方に目を向けるならば、全体としてはロゴスがすみずみまで行きわたり、調和が保たれていると言えるが、地上の個々の諸事物の次元では、不和になったり互いを害しあったりして、生成消滅している。諸個物が与奪のなかでひしめきあうことは、個々にとっては消耗していくことであるが、そうした個々の生成消滅は宇宙全体の規模でいえば、あたかも一つの生きものが新陳代謝を繰り返して生命を維持するごとく「宇宙という一つの生きものの、妨げられることのない、本性にかなった生を完成へともたらす」(IV4[28]. 32. 44-47) ことなのである。

地上界で起きる個々の出来事は、全体的秩序の内に吸収されていくことが想定されている一方で、そうした出来事が地上界の上位にある天体や星々、さらには宇宙全体の魂の固有の意志に基づくものではないことは重ね重ね強

調される⁽⁷⁾。地上の諸事物が天体や星々の影響を受けること、時には望ましくない作用を及ぼされること自体はプロティノスは認めているが、そうした影響は天体や星々の固有の意志のもとに生じる事柄ではなく、作用を受け取る側の抱える事情や状態の側に問題があるとする。作用を受ける側によっては、本来有益な作用であっても有益なものとして受け取れないことが生じうるとする (IV4[28]. 38. 1-13)。

物的な作用の連鎖に魂固有の意志の関わりを認めない点でプロティノスは一貫している。その意味で典型的というか本来的な固有の意志を有しているのが宇宙全体の魂である。知性界においてすべてが一体となり密集しているアイデアを凝視しつつ、知性界から受け取るロゴスを媒介して、可視的な宇宙の形成・展開に立ち会うのが宇宙全体の魂の役割である⁽⁸⁾。宇宙展開にあたって、宇宙全体の魂が固有の意志をもって関わっているのは、展開していく先にある個々の諸事物に関する事柄ではなくて、展開の源泉であるアイデアの方であることが示唆されている。そうであるなら、宇宙全体の魂の固有の向きは、自らの源泉の方に自らのまなざしを集中させること、つまりは自己観照 (テオーリア) に徹する姿勢であると言える⁽⁹⁾。プロティノスの観照は、自らが観るものを展開することで下位の事物を産出する働きを伴っている。究極の源泉たる一者を観ようとして、一者とは異なり、ある意味で一者の自己観照と言える知性が生じ、知性界のアイデアを繰り広げた形で観ようとして知性にとどまり切れない魂が生じ、それに伴い宇宙が展開したとされる流出論体系にあって、観照それ自体は知的活動であっても、その結果として多なるものの産出を伴っている。観照の産出的側面から、——特殊な、かつ広い意味においては——物体界すなわち「自然」⁽¹⁰⁾における諸生物の産出活動が、「観照」と呼ばれることがある⁽¹¹⁾。一方でどのような生物であっても、産出活動に際して「固有の意志」が関わるということがないと明言される。たとえ産出に携わる生物が固有の意志をもっていたとしても、産出の際にその固有の意志が働くわけではないとされるのである (IV4[28]. 37. 21-26)。本来的な意味における観照においては、その本質は、あくまで自

らの源泉にまなざしを向けることのうちにあり、産出活動を伴うとしてもそれは副次的なものに過ぎない。産出活動との関わりを放免された「固有の意志」が担うものは、魂の中心を自らの源泉の方に向かわせること、言い換えれば本質的な観照に徹することである。

魂の固有の向きが、本来的には、知性界に向き合い観照のうちに自らを据えることであるならば、そうした本来的な有り方に常に立ち尽くしている魂は、宇宙全体の魂であるということになろう。宇宙全体の魂は、自らはいかなる身体にも——天体や星々にすら——降下することなく、宇宙身体全体にロゴスを受け渡す媒介の役割を担っているが、自らの目は常にロゴスの源泉たるアイデア界に向けられている。

それでは物体的作用の連鎖が及ぶ特定の身体へと降下し、自らの身体の世話に追われる個別的魂にとって、固有の向きが、宇宙全体の魂におけるごとく知性界に向かって確固不動たるものとして据えられることがあるのだろうか。個別的魂の固有の向きあるいは固有の意志が宇宙全体の魂のそれとはいかに重なり合うのか、あるいは異なるのか。また異なる個別的魂それぞれの固有の向きは、どういう点でお互い違っているのだろうか。

第3章 魂相互の「固有の向き」の差異と一体性

「一つの生きもの」としての宇宙全体の固有の意志は一つであっても、諸部分は宇宙全体の固有の意志にはお構いなしで、めいめいの力による動きをなしている。そうであっても、宇宙全体の魂と諸々の個別的魂との間で、究極的には固有の向きないし固有の意志は重なり合い、一体となることが可能だと言われている。

（引用文4）「その一つの生きものは、多くの諸部分それぞれの固有の意志を含んでいるが、それらの固有の意志のすべては、一つの生きものの全体としての固有の意志が向かうものと同じところに向かっている。

るのである。例えば、一つの生きもののある部分の欲望は別の或る部分に向けられるのであるが、それは或る部分が他の部分の或るものを必要として得ようと欲するからである。また怒りも何かしら腹立たせる他の部分に向けられるのであり、成長も他の部分から得ることであり、生成は発生した部分とは別のものに到達することなのである。しかし、その全体的な一つの生きものは、そうした諸部分においてはそうした作用を営むのだが、それ自身は善を求め、むしろ観ているのである。」(IV4[28]. 35. 26-32)

上記引用文4では、一つの生きものとしての宇宙を統括する宇宙全体の魂と、個別的魂との間で、固有の意志が重なり合うことが掲げられているが、引き続きいくつか事例として述べられたのは、諸部分が全体の固有の意志にお構いなしに生成消滅している様である。そのうえで、宇宙全体の魂があくまでまなざしを善に向けていることが語られたあと、たとえ個別的魂であっても同様に善に目を向けることが可能であると言われる。ただしそうしたことが個別的魂に可能になるのは、あくまで諸情念を超えた「正しい固有の向き」に自らを据えていることが条件として求められる (IV4[28]. 35. 32-34)。

宇宙全体の魂と個別的魂が、究極的には同じ善に向かって固有の向きを合致させることができるとするプロティノス説は、第2章冒頭でも触れたように、宇宙全体の魂と個別的魂を従属関係に見るのではなく、「姉妹魂」として「魂」である限りは、同じく知性に向き合う資格を有しているとする魂論を基盤にしていると言える。一方で身体的生の次元では、宇宙全体の魂と個別的魂とは同等とは言えない。引用文4で言われているごとき宇宙の諸部分の身体的生については、宇宙全体にとっては何ら影響はないとしても、個別者は身体的には宇宙の一部に過ぎない以上、身体的作用への何らかの対処を強いられる。身体的作用への対処は、しばしば人を情念の虜にする。個別的魂にとっては、情念に振り回されることなく、自らの正しい固有の向きを確立するという修練が求められる。その修練により、観照の目をアイデアおよび

知性界、さらには一切の源泉である一者へと向けていく可能性が開けるのである。

最後に、当稿の題目である個別性の成立ということを、「固有の向き」との関係で考えるならば、個別者相互のちがいは、「固有の向き」をいかに向けるべきところに向けてきたか、つまりは観照にどれほど徹しているか、その方向性と強度の差であると言える。どの魂も究極的には一なる知性⁽¹²⁾、さらには究極の根源たる一者を起源にしているのならば、「どこに向かうべきか」という結論はある意味で一つであろう。だが結果としてその向かい方には個々によって多様性がある。魂のまなざしがどこにどの程度向けられているか、その向きや強弱についてはさまざまである。それに伴って、それぞれの魂が自らが関わる身体に対して、どのような距離感を保って対処しているのかもさまざまである。プロティノス自身は知性に立脚する観照生活に重きを置いていたが、人それぞれに多様な生のあり方を決して否定するわけではない。彼は世界を劇に喩え、劇が様々な役目を演じる役者の演出によって完成されるように、多様な人間で構成されることが世界の調和に必要なとする⁽¹³⁾。

プロティノスの哲学は身体軽視に傾いているように見られがちな面をもっているが、自らが結びつく身体を魂が自らに「固有の向き」にしたがって選び取っているという説からは、この「私」と身体との結びつきを決して単なる偶然の出来事だとみなしているわけではないことが窺える。「私」が今この「私」として地上の生を営んでいることは「私」自身の魂の固有の向きに深く結びついている。そうであるなら、この「私」のあり方をよく見つめ、「私」の固有の向きがどこにどのように向けられているか、何よりも自らの生の基本姿勢を見定めることの大切さを示唆しているのが、プロティノス哲学であると言えるのではないだろうか。

凡例

※引用文については基本的にアームストロング訳にしたがう形で訳出した。

アームストロングにしたがわない部分がある場合は、その都度、註等で明記した。

※参照・引用箇所の末尾に（例：IV4[28].32.4-7）とあれば、プロティノス『エネアデス』第IV論集第4論文〔全54作品のうち28番目に執筆された論攷〕第32章4行目～7行目からの参照・引用であることを示す。

使用テキスト：Plotini Opera, I-III(H-S2), Henry, P. et Schwyzer, H-R., Clarendon Press, Oxford, 1964-83.

邦訳：『プロティノス全集 全四巻』（田中美知太郎監修）、中央公論社、1986-88.

英訳：Plotinus 7 vols. Armstrong, A. H., Loeb Classical Library, Cambridge, Harvard University Press, 1966-68.

英訳およびコメンタリー：Gurtler, G. M. (2015) *Ennead IV.4.30-45&IV.5 Problems Concerning the Soul*, Parmenides Publishing, Las Vegas, 2015.

文献

- Blumenthal, H. J. (1996) "On Soul and Intellect", in Gerson (1996) , 82-104.
- Gerson, L. P. (ed.) (1996) *The Cambridge Companion to Plotinus*. Cambridge, Cambridge University Press.
- 近藤智彦 (2009) 「ストア哲学と新プラトン主義の間ープロクロス『摂理について』からー」『新プラトン主義研究』9, 5-25.
- 岡野利津子 (2015) 「観照の展開としてのプロティノスの発出論 (III8 [30])」『新プラトン主義研究』14, 39-48.
- Phillips, J. (1995) " Plotinus and Iamblichus on προαίρεσις", *Ancient Philosophy*, 15, 135-153
- Remes, P. (2007) *Plotinus on Self: The philosophy of the 'We'* , Cambridge, Cambridge University Press.
- 渡辺華月 (2013) 「個としての不死なるものープロティノスを通しての考察」『関西哲学会年報 アルケー』21, 168-179.

○渡辺華月 (2015) 「プロティノスにおける魂の降下について—『エネアデス』IV3, 9-17章を中心に」『新プラトン主義研究』14, 49-60.

註

- (1) 魂のある種の基本姿勢を表わすプロアイレシスは、統一した訳語をあてはめるのが難しい用語である。邦訳を見ても、文脈に応じて「意志」「選び」「目的」等と訳し分けられている。それぞれの魂の本性に密着した有り方を表わす言葉であることは間違いないので当稿では「固有の」を付加して、プロティノスが言うプロアイレシスを扱う際には基本的に「固有の向き」「固有の意志」と表わすこととする。なお、「プロアイレシス」はアームストロング訳ではしばしば *deliberate choice* (思慮深い選択) と訳されているが、プロティノスのプロアイレシスは行為に際して思慮深く具体的な選択を与えるというようなことを意味しているのではない。むしろ、個々の魂がそれぞれの本性に密着した仕方でもっている、知性界に関わる基本姿勢であるように思える。当稿では構文上アームストロング訳に従う場合も「プロアイレシス」の訳語については「固有の向き」「固有の意志」と表わすことにする。フィリップスは「プロアイレシス」がアリストテレスやイアンブリコス等後期新プラトン主義で「思慮深い欲求」を意味する語として使われたのとは違い、プロティノスはその用語に独自の意味をもたせているとする。フィリップスは、プロティノスの「プロアイレシス」は *metaphysical purpose or intention* とでも言うべき事柄であるとする。Phillips (1995), p141 参照。
- (2) 「宇宙魂」や「万有魂」と訳される「ヘー・トゥ・パントス・プシューケー」を当稿では、宇宙に全体として秩序立った動をもたらし働きに即して「宇宙全体の魂」と訳す。
- (3) 身体を伴う地上の人間の魂でさえも、常に知性界にとどまる上位部分を有していることについては、第6論攷(IV8)「魂の肉体への降下について」8章参照。
- (4) 宇宙全体の魂と個別者の魂が「姉妹魂」の関係にあることについては、第27論攷(IV3)「魂の諸問題について 第一篇」6章参照。
- (5) 「ロゴス」はプロティノスが最も頻繁に用いる用語であると言える。「理性」「理法」「言葉」など様々な意味で用いられるが、ここでは、宇宙の形成原理、つまり知性界の原型たるアイデアが、繰り広げられる形で感性界を形成する原理として展開したものを指す。

プロティノスのロゴス概念については以前扱う機会があった。渡辺(2015), p50-52 参照。

- (6) 「天体」や「星々」が不滅の物体であることについては、第 40 論攷 (Ⅱ 1)「天について」参照。
- (7) IV 4 [28]. 31. 48-50, IV 4 [28]. 35 全般、IV 4 [28]. 36. 23-27, IV 4 [28]. 39. 23-26, IV 4 [28]. 40. 27-28, IV 4 [28]. 42. 3-7 参照。
- (8) 宇宙全体の魂がアイデアをロゴスとして展開した形で可視的に繰り広げることを欲して、この宇宙を形成したということが第 45 論攷 (Ⅲ 7)「永遠と時間について」11 章でミューツスの語られている。
- (9) プロティノスのプロアイレシスをテオーリアと重ねる解釈については、フィリップスから示唆を得た。Phillips (1995), p146 参照。
- (10) プロティノスの「自然」は宇宙全体の魂の最下位部分、最下位のロゴスとして、知をもたないが成長や生殖の働きを担うものである。
- (11) 観照の産出的側面と、そこから派生して自然における生物的な産出を広義の観照の一種としてとらえている作品は第 30 論攷 (Ⅲ 8)「自然、観照、一者について」である。また、第 30 論攷で説かれる観照理論をプロティノスの哲学体系の核心にあるものとして詳しい考察を加えた論文としては岡野 (2015) 参照。
- (12) 「一なる知性」と述べたが、個性性は知性より下位、すなわち魂以下の次元で成立するものなのか、それともアイデアの世界である知性界においても個別的魂に対応した個別的知性が存在するのか、これはプロティノス研究者の間でも解釈が分かれる問題である。プロティノスにおいて個性性の成立を考えるには、この問題にも踏み込んでいく必要がある。私自身はプロティノスが個別的知性の想定を持ち続けたとする見通しのもとに、その問題に言及したことがある。渡辺 (2013) 参照。研究者の間ではプロティノスが一貫して「個別的知性」の存在を考えたとする意見が多いが、終生それに懐疑的な見解を表明した研究者の代表としてブルーメンタールをあげることができる。Blumenthal (1996), p99-100 参照。「個別的知性」ないし「個々人のアイデア」を巡って 1960 年代から続いている一連の議論については Remes (2007) p80, n168 参照。
- (13) 世界を劇に喩える記述については第 47 論攷 (Ⅲ 2)「神のはからいについて・第一篇」15～18章参照。また、世界を劇に喩えることはストア派に由来することを近藤は指摘す

る。近藤 (2009) p10 参照。近藤が参照箇所としてあげるストア派の著作としては、*SVF* I. 351、*SVF* III. 371 参照。

プロテイノスにおける「個別性」の成立——魂のプロアイレシス（固有の向き）に注目して——